

水野治三郎画 教育掛図について

About the natural history of higher education wall chart work
Jisaburo Mizuno

上田 啓未¹、堀井 美里²、堀井 洋²、古畑 徹¹

UEDA, Hiromi HORII, Misato HORII, Hiroshi FURUHATA, Toru

1 金沢大学資料館、2 合同会社 AMANE

はじめに

金沢大学資料館（以下資料館）では2009年（平成21年）度より「金沢大学資料館ヴァーチャルミュージアムプロジェクト」（以下VMプロジェクト）を実施し、WEB上で資料館所蔵資料の高解像度画像と資料情報を公開している。現在は金沢大学附属図書館（以下附属図書館）と連携してそれぞれの資料情報の公開を進めている^(注1)。現在公開中の第四高等学校教育掛図の中には、水野治三郎画と筆者の分かる肉筆掛図が含まれており、調査により所蔵数、筆者、掛図原画について幾つか成果がえられた。本稿はこれについての調査報告とする。

1. 掛図の概要

現在VMプロジェクトでの公開資料は金沢大学の前身校由来の資料が中心であり、2011年（平成23年）度までの成果として次の計702点を公開している。石川師範学校写真資料（295点）、金沢大学医学図書館図面（67点）、金沢病院設計図（14点）、きのこムラージュ標本（30点）、第四高等学校物理実験機器（187点）、そして今回の対象資料を含む第四高等学校教育掛図（109点）である。これらの公開資料は金沢大学が所蔵する資料の一部であり、今後も継続して資料公開を行う予定である。

今回調査対象とする資料は旧制第四高等学校（以下四高）由来の教育掛図（以下掛図）の一部にあたり、これらは附属図書館に所蔵されている。全体の点数は900以上に及ぶとされ、掛図の制作・使用時期は明治期のものである^(注2)。掛図とは黒板や壁に掲げ図等を示した教材で、初等教育で特に多く使われた。その理由は1872年（明治5年）の「学制」の発布により多数設立された小学校での教科書不足を補うため多く使われた。調査対象の掛図はその所蔵から初等教育での使われた掛図ではなく、高等教育で使われたものであり、その中の肉筆のものは学校独自制作と考えられ、当時の教育を知る上でも貴重である。

掛図には印刷物（版画のものも含む^(注3)）と肉筆のものが存在し、印刷物の掛図はすでに京都大学の調査を受け、京都大学附属図書館の電子図書館貴重資料画像サイトにて京都大学所蔵教育掛図と共に金沢大学所蔵近代教育掛図：印刷図編として250点が公開されている^(注4)。VMプロジェクト

トでは京都大学で公開されている以外の印刷物の掛図と肉筆掛図を公開対象とし、その一部（109点）を昨年度の成果として公開した。肉筆掛図の中には明確に筆者の分かる掛図が12点含まれていた（内3点をVMプロジェクトで公開している）。また金沢大学と同様に四高由来の物理実験機器資料を所蔵している石川県立自然史資料館（以下自然史資料館）にも筆者分かる掛図が3点存在することが分かった。これらには全て水野治三郎画と記名され、金沢大学、自然史資料館所蔵の計15点を水野掛図とし、調査を行った。

2. 二人のジサブロウ

2.1 水野治三郎

対象資料には水野治三郎画と記名があり、この人物は、金子一夫氏の『近代日本美術教育の研究』（280頁）によると

「石川県金沢区会は明治十四年区費を以て、水野治三郎、内海周太郎の両名を京都府画学校へ入学させ、両名が明治十八年十二月に同校東宗卒業すると、水野を石川県専門学校兼師範学校の画学教員助手に、内海を小学校巡回教師に任じた」

とあり、石川県専門学校（以下専門学校）と石川県師範学校（以下県師範）とで画学の教員助手を務めた人物のようである。ここに出る京都府画学校は、現在の京都市立芸術大学（以下京都芸大）の前身校であり、東宗は現在の日本画に当たる。京都芸大の『百年史』（180頁）の画学校卒業生名簿では、水野治三郎が1885年（明治18年）11月、東宗を卒業したのを確認できた。上記引用で水野の卒業年が12月となっているのは同じく金沢区費で留学した内海が12月卒業の為、同月とされたと思われる。また1965年（昭和40年）発行『市史年表 金沢の百年 明治編』でも区費にて上記2名が留学した旨を確認した。

金沢大学資料館所蔵の『石川県師範学校「明治十三年以降 職員沿革略表」』では1886年（明治19年）1月23日～1887年（明治20年）4月12日まで県師範の教員助手としての在職記録を確認した（図1）。1887年（明治20年）4月以降の県師範での教員助手等の在職は確認できなかった。また先行研究や記事によると専門学校にも兼任し在職していたようだが、専門学校の在職を示す原簿は金沢大学の所蔵では発見できていない。1887年（明治20年）専門学校の後身として開校する第四高等中学（以下高等中学）への教員としての在職記録は高等中学、四高の職員原簿に当たる『職員履歴 第一輯 庶務係』では見つからなかった。

では教員助手とはどのようなものだったのだろう。『石川県職員録（明治18年）』には教員助手の職位の記載はなかった。『石川県史資料近代篇（8）、（9）』『学事報告』の該当年の任免頁にも同様に記載は無かった。『第四高等中学一覽』には雇教員の記載があり、これが教員助手に該当すると思われる。

板垣氏の『金沢大学の淵源』（114頁）によるとこれら『石川県職員録』『第四高等中学一覽』『職員履歴 第一輯 庶務係』から教職員数を算出している。

「…助教諭及び助手が16名であり、事務官を含めた総数は23名であった。…中略…石川県中学師範学校および石川県師範学校の卒業生3名、本校卒業生5名が助教諭あるいは教員助手にいた」

この教職員数は高等中学発足後のもので、水野在職時と同等数ではないが高等中学にも教職員の多くが引き継がれたため参考となろう。『文部省十三年報 石川県年報（明治十八年）』専門学校の頁（297頁）には「本校教員ノ総数ハ二十五名」とある。これにも教員助手についての記載はない

が総教職員数は板垣氏算出と近いものだと考えている。また教員助手はどのような職務を負っていたかはそれを表す資料は現状では見つからない。教員助手としての水野治三郎については以上の事しか分からなかったが、同様の経歴を持つ人物が同時代にもう一人おり、それが加賀象嵌師の9代水野源六であり同一人物と考えている。

2.2 9代水野源六（水野次三郎）

次に9代水野源六について考察する。水野源六家は藩政期より続く加賀象嵌師の家系で代々水野源六を襲名している。加賀象嵌とは金属に象嵌を施すもので、地金となる金属を鑿で溝を掘り、そこに別の柔らかい金属（金・銀・赤銅・四分一など）を埋め込み文様とする技法である。加賀象嵌には主として平象嵌と糸象嵌が使われる。武具等金属装飾に広く使う事ができる技法である。初代水野源六好房は大阪の生まれで、京の後藤顕乗に学び、慶長年間（1596～1614年）に金沢に移住し、2代藩主利長に仕える。2代水野源六照善の時には加賀象眼の指導的立場にあった後藤悦乗が江戸に移り、藩の御用は後藤家から水野源六家が引継ぎ、加賀象嵌の中心を担う事となった。その後4代～10代まで水野源六は皆養子であった。

1905年（明治38年）刊の『金沢工業沿革誌料』（77～78頁）には9代水野源六の本名は記載されていないが、「九代光美 名ハ源六 現存 宝船路町紙商石王孫平ノ第二子ナリ幼ニシテ八代光春ニ養ハレ、明治十五年京都府画学校ニ入り望月玉泉ニ就キ画ヲ学ビ同十八年業ヲ卒ヘ家ニ帰り養父ニ従ウテ彫金術ヲ習ヒ養父歿後業ヲ継キテ能ク家声ヲ墜サス今長土堀四番町ニ住ス」とある。また今井一良氏の論文文献17（18頁）には

「除籍簿によると「9代源六は旧姓石王次三郎、明治元年2月9日の生まれ、石王孫平の三男」^(注5)とあり、今後、原資料への調査を行いたい。また、1919年（大正8年）刊の『実業功績者事績調』の水野源六の頁（25頁）には

「金属器製造業 水野源六 明治元年二月九日生 先祖以来代々金工ヲ業トス明治十五年金澤區費留學生ニ擧ケラレ京都府立畫學学校ニ入り帝室技藝員望月玉泉ニ學ヒ同十八年業ヲ終ヘ翌年二月石川縣専門學校兼師範學校教員トナリ育英ノ任ニ當リシカ同二十年之ヲ辭シ家業ノ貴金属象嵌業ニ従事ス」とあり

さらに『水野源六履歴下書』『水野源六家文書近代2』（34、40頁）では

「明治十八年二月 石川県専門學校・師範學校毛筆画教員拜命
明治十九年十二月 離職ス」

別項には「明治十九年 石川県専門學校兼師範學校画教員」毛筆画教員として勤務したとあるが、1885年（明治18年）2月にはまだ画学校在学中であり1886年（明治19年）2月ではないだろうか。

『金沢銅器製造元記』^(注6)『水野源六家文書近代19』（54～55頁）には

「同十五年、五月十四日水野次三郎出立相成
候テ、同十八日、西京画学校入校被成
流儀者四条画、師匠ニハ西京区
二十四組道場丁、望月玉泉方
同十八年三月卒業仕候、金沢ニ帰国
相成候
同十九年四月、金沢区__師範学校

等、専門学校之画学教員相成候

後ノ九代水野源六光美ナリ」

(付紙)

「水野次三郎ハ、水野源六養子ナリ」

「八代目水野源六光春、明治二十八年三月廿一日病死」^(注7)

とあり9代水野源六についての記録からも専門学校、県師範での勤務が記録されている。

以上と参考文献より9代水野源六の初期の経歴を中心に以下にまとめる。

9代水野源六光美 本名：水野次三郎

1868年(明治元年)2月9日生まれ 宝船町紙商石王孫平の第三子(石王次三郎)、幼少期に8代水野源六の養子となる

1882年(明治15年)金沢区の留学費を得、京都府画学校東宗へ進学 望月玉泉に学ぶ。

1885年(明治18年)11月 画学校卒業、金沢に戻る

1886年(明治19年)1月23日～1887年(明治20年)4月12日 石川県師範学校図画教員助手

1886年(明治19年)2月?～1886年(明治19年)12月 石川県専門学校毛筆画教員

1887年(明治20年)頃～ 家業に専念する。

1895年(明治28年)8代水野源六死去。9代水野源六光美となる

1938年(昭和13年)没

さて治三郎と次三郎表記の違いだが、掛図への記名は水野治三郎であり、教員助手は水野治三郎とし、9代水野源六は各記録から水野次三郎として論じてきた。水野治三郎と9代水野源六はそれぞれ画学校に学んだとされ、卒業年も1885年(明治18年)となっている。京都芸大『百年史』では明治18年卒業の水野姓の者は水野治三郎一人である。専門学校側の職員原簿などは確認できなかったが、上記のとおり9代水野源六側の記録により水野掛図の筆者・水野治三郎と9代水野源六は同一人物とし、ここで氏名の統一を行っておきたい。先日行った金沢美術工芸大学所蔵の水野家資料調査で水野治三郎銘の図案を1点確認した。また黒川威人氏の論文で示されていた画号の玉璋も同調査で確認できた。さらに金沢市近世史料館所蔵、『水野源六家文書近代2』の中にも水野治三郎銘の書きつけが存在し、9代水野源六が治三郎表記を利用しているのを確認した。水野掛図には水野治三郎画と記名されている事から、今後は水野治三郎(以下水野)と統一して論を進める。

3. 京都府画学校と工芸界

では京都府画学校東宗ではどのような教育がされ、なぜ象嵌師を継ぐ水野が入学したかを考えてみたい。

京都府画学校(以下画学校)は1880年(明治13年)、田能村直入、幸野棟嶺(北宗担当)、望月玉泉(東宗担当)らによって主に私塾にて教育されていた日本画を公的に広く認知させるために設立された。当時公的な美術学校は1876年(明治9年)開校の工部美術学校しかなく、画学校は1889年(明治22年)開校の東京美術学校には9年先んじて開校している。当時の修業年限は3年であり、1882年(明治15年)入学、1885年(明治18年)卒業の水野は修業年限を少し前に卒業している。専攻は東西南北に分けられ、松尾芳樹氏の論文『学校出仕について』(15頁)と『京都

府画学校の教育』(5頁)、『京都府画学校の研究』(134頁)の中で各宗が詳しく説明されているので引用する。

「まず、東西南北各宗の教授分野を見よう。明治13年「京都画学校規則」では各宗一塾を設けるとして、以下のような規定を示している。

東宗 土佐派円山派等所謂大和絵ノ派

西宗 野画油絵水画鉛筆画等

南宗 所謂文人画

北宗 雪舟派狩野派等」

とある。現在の日本画と呼ばれる宗派は西宗以外であり、特に東宗と北宗の違いは明確ではなく、当時も問題視されていたようだが改善はされなかったようだ。東宗の詳しい教育内容はというと

「東宗の教育は、運筆、着色、模写、写生、位置、余科の六科によって構想された。余科と呼んでいるのは1ヶ月に1~2日を選び行われる技術教授の性格をもつ講義である。初等教育にあたる六級は、運筆、模写、予科の三科にはじまり、次の五・四級で写生と位置すなわち画面構成を学んだ。残る一年半は、着色や淡彩、中彩色、極彩色の順に学び、最上級にあたる一・二級では、板地への著彩や、砂子や泥引きの方法、箔地彩色、諸図伸縮法に至り、装飾法や大画面制作への導入を含んでいる。

運筆手法としては、草木百花、菜蔬器物にはじまり、魚虫、小禽、山水を経て、動物、人物に至った。絵手本により提示される課題は、四日ごとに浄写することになっており、臨画と写生を重視する課程は、諸種の必要な知識に配慮している。技術教育を中心とする実用的なカリキュラムといえる。」

水野は象嵌図案を制作する事を念頭に画学校で学んでいたはずで、これらカリキュラムは絵手本重視、写生、運筆等は図案制作にも必要な技術であり、実用的な技術向上は望ましいものであっただろう。東宗での教育に利用された絵手本やその現存数等は松尾氏の論文に詳しいが、学生作品については現存するものもあるようだが、現状では水野の筆によるものや関連資料は不明である^(注8)。

京都府画学校設立には次の意図があったようで

「京都府側は開校当初から工芸家教育のための工業科の設置を望み京都の商工家を用掛という外部協力員に任命して協力体制を作った。…中略… 府が望んだものと画家たちが望んだものには当初からずれがあり」

とあり、京都においても殖産興業は工芸家を取り巻く問題であったようだ。このような意図を8代水野源六はどれほど理解して水野を入学させたかは分からないが、水野は京都府の意向を体現する事となったようだ。

当時の工芸界は図案に重きが置かれる傾向にあり、1875年(明治8年)から政府の意向で工芸による海外への国家アピールと殖産興業のため日本画家等に図案を描かせ、各地の工芸家に図案指導を行った^(注9)。1876年(明治9年)にはその図案集『温知図録』の第1集が刊行された。この図案集12巻~15巻には金工図案が収録されており、金沢で設立された金沢銅器の図案が収録されている。金沢銅器会社は明治維新後、加賀藩の御細工所が解体され職を失い危機的状況にあった細工者と御用職人の殖産興業のために長谷川準也(後の2代金沢市長)の出資で1877年(明治10年)に設立された銅器会社が社名を変えた後の会社である。この銅器会社設立に8代水野源六も棟取として名を連ねている。8代水野源六は1881年(明治14年)に上野公園で開催された第2回内国勧業博覧会で妙技賞杯3等を受賞するなど中央工芸界との繋がりも持ち、その動向は十分に理解していたと思われる。『温知図録』に見られるように日本画家に図案を描かせる例は他にもあり、9代水

野源六よりも20歳若く、加賀象嵌師として石川県無形文化財、国の無形文化財に指定され活躍した米沢弘安の兄・佐吉は家業を継ぐべく銅器会社に入社し、合わせて日本画も学び（後に名古屋で画家になる）銅器会社図案方を勤めた。また日本画家の玉井敬泉は米沢弘安と同窓で親交があり図案を描くなど、日本画と金工との関係は当時近いものでもあったと言える。

水野は金沢区から留学費を得たわけだが、それには銅器会社社長であった、長谷川の理解と尽力があったと推察する。しかしその区費を得るに至った経緯は『金沢市教育史稿』『石川県教育史』ではみられず明確になっていない。また1886年（明治19年）金沢区は小学校の図画を毛筆画に決定し、専門学校と兼任で教員助手となった県師範では、水野を毛筆画担当教員として採用したと思われる。また1887年（明治20年）には納富介次郎を校長に迎え、金沢工業学校（現石川県立工業高等学校）が開校する。同校には専門画学部、美術工芸部、普通工芸部が設置され、水野も教員として勤務したかと思われたが在職の記録は見られなかった。

水野の画学校進学は東京美術学校など美術学校専攻科に図案科が設置される以前の事であり、8代水野源六は図案制作修業の受け皿、留学費を与えた金沢区は図画及び工芸図案教員養成を目的として画学校を考え水野を入学させたと推察する。

4. 水野掛図について

では水野掛図自体はどのようなものかといえば、900点以上残された四高由来の明治期の教育掛図の内、水野治三郎画と記名のある肉筆掛図である。水野掛図は附属図書館に12点、自然史資料館に3点所蔵されている。それらの制作年は現在具体的には明らかではない。また先に掛図は四高由来と述べたが、水野掛図には「石川県専門学校」と「第四高等中学」の蔵書印が押されたものが5点あり、両校はそれぞれ四高の前身校であり、水野の在職期の1886年（明治19年）から1887年（明治20年）には専門学校として存在した。四高の変遷は表1に示す。水野掛図自体は専門学校から高等中学、そしてその後四高にもたらされ今日、金沢大学に残されたものと思われる。

表1（明治9年以前は略）

西暦（明治）年	四高の変遷	師範学校の変遷	水野の動き	
1876（明治9）年	啓明学校	石川県師範学校／石川県女子師範学校		
1877（明治10）年	石川県中学師範学校	第一師範学校／第一女子師範	8代源六 銅器会社設立に参加	
1881（明治14）年	石川県専門学校 (明治21年廃校)	略		
1882（明治15）年			京都府画学校入学	
1883（明治16）年			石川県師範学校	
1885（明治18）年			京都府画学校卒業	
1886（明治19）年			石川県尋常師範学校	専門学校・師範学校在職
1887（明治20）年	第四高等中学校			
1894（明治27）年	第四高等学校			
1895（明治28）年			9代水野源六光美となる	

石川県専門学校は1881年（明治14年）、その前身の石川中学師範学校が専門課程を設ける形で発足した。当初は予備科と専門科（法学科・理学科・文学科）を設け修業年限は全6年で6カ月を1期とし各科3年を6段階で修学した。しかし1884年（明治17年）に予備科は廃止され、修業年限4年の附属初等中学が設置された。1886年（明治19年）の「中学校令」により専門学校は閉鎖1888年（明治21年）され1887年（明治20年）第四高等中学校が設置された。

水野掛図に関する記録としては1894年（明治27年）刊の『第四高等中学校本部和漢書目録』（以下和漢書目録）（73～78頁）には水野掛図と同名タイトルのものが存在し、表記には一軸とあり、軸装のものであることが分かるが、製作年は記載されていない^(注10)。近いタイトルのもの含めると現存する水野掛図15本全てに記載されている。現存する水野掛図の表記と『和漢書目録』の記載と英名と和名で記された動物図に備考を加えたものを表2にまとめた。水野掛図の制作時期は水野在職期の1886年（明治19年）から専門学校、高等中学の蔵書印の無い物でも『和漢書目録』収録年の1894年（明治27年）までだと考えている。また専門学校から高等中学へ移行する際に引き継がれた物品が記載された目録『旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録』（以下、引継目録）には掛図一点一点の記載はないが「生物学教育掛図 本校制」と記載されるものが14軸ある。これが水野掛図である確証はまだないが同一である可能性も視野に入れておきたい。

現在VMプロジェクトでは次の3点の水野掛図が公開されている「植物想像ノ図」「食虫植物図」「葉実の図」である。各水野掛図の写真は文末にまとめて示す。（図5 掛図1～掛図15）

では水野掛図がどのような教育に利用されていたかという点、先の『和漢書目録』では水野掛図（近いタイトル含む）はすべて博物学に分類されている。博物学中の植物学に4点、動物学に8点、解剖・生理・衛生学に同様に3点記載されている。これにより水野掛図は水野の在職した画学の教育ではなく、博物学の教育で利用されたものとわかる。

当時、専門学校の博物学の教員は大島多計比古（たけひこ）で『職員履歴 第一輯 庶務係』によると1898年（安政4年）金沢市生まれで、1879年（明治12年）東京師範学校中学師範科を卒業とある。1885年（明治18年）から専門学校の3等教諭に就き、後の高等中学、四高にも勤務し教授となっている。また同履歴には「1885年（明治18年）12月23日 博物標品採集ノ廉ヲ以テ為慰労金五円下賜」とある。大島が採集した博物標品とはどのようなものか分からないが現存資料との関係を注意しておきたい。

画学の教員は得田耕（たがえす）で、得田は1898年（安政4年）現・白山市の生まれで、1876年（明治9年）石川県師範学校小学師範を卒業後、東京で画業修行し、1883年（明治16年）から専門学校に3等助教諭、1885年（明治18年）には専門学校、農業講習所、師範学校の兼任で2等助教諭として勤務している。その後高等中学、金沢工業学校にも勤務している。この得田は1886年（明治19年）、専門学校附属初等中学に入学する西田幾多郎の義理の叔父（西田の母の妹を妻に持つ）であり、西田が生涯師と尊敬した北条時敬（ときゆき）（専門学校2等教諭・数学担当）と入学前に引き合わせたのもこの得田である^(注11)。また得田の長女寿美（ことみ）は後に西田の妻となるほど西田と得田とは親密な間柄であるが、西田が専門学校時代を回想した手記では得田についてはほとんど描かれていない。専門学校の雰囲気分かる西田の文章を引用しておく。（明治の始頃、金澤の古本）

「私共が専門学校（四高の前身）の生徒であった頃でも、散歩の序に古本屋を探せば、まだ可な

表2

現存掛図表記	和漢書目録 (分類)	印	所蔵	VM公開	備考	図5
海百合ノ図	海百合ノ圖 (植物学)	なし	自然	×		掛図1
菓実ノ図	菓實ノ圖 (植物学)	なし	金大	○		掛図2
植物想像ノ図	植物想像図 (植物学)	なし	金大	○		掛図3
食虫植物図	食虫植物圖 (植物学)	有	金大	○		掛図4
ヒ路之図	ヒ鷺ノ圖 (動物学)	なし	金大	×	ヘラサギ	掛図5
鳥類骨格図	鳥類骨格圖 (動物学)	なし	自然	×		掛図6
Rhinoceros Horn-bill	ライノセロス、ホリンビル圖 (動物学)	なし	金大	×	サイチョウ	掛図7
蜘蛛猿ノ図	蜘蛛猿圖 (動物学)	なし	金大	×		掛図8
Goat-Sucker.	ゴートサッカー圖 (動物学)	有	金大	×	ヨタカ	掛図9
蛙類編還之図	蛙類變遷圖 (動物学)	有	金大	×		掛図10
企鵝之図	企鵝圖 (動物学)	なし	金大	×	ペンギン	掛図11
植蟲等ノ図	植虫等圖 (動物学)	なし	自然	×		掛図12
血液循環図	血液循環ノ圖 (解剖学)	有	金大	×		掛図13
人体縦横裁面図	人躰縦横裁面圖 (解剖学)	有	金大	×		掛図14
心臓図	心臓縦斷圖 (解剖学)	なし	金大	×		掛図15

印＝「石川縣専門學校」「第四高等中学校」、自然＝石川県立自然史資料館

金大＝金沢大学附属図書館

掛図は「植物想像ノ図」のみ「紙に彩色」、他「紙に墨彩」

り色々な漢文の古本があった。金沢は筆頭の大藩であった所爲か、明治の始、他に先んじて西洋の學問が取り入れられ、比較的進んだ専門の學校が設けられた。専門學校と云うのは、藩の學校から色々な變わってきた學校である。上級のものも下級のものも、教師も生徒も、皆友達のような本當に家族的な學校であった。今に思出が多い。私共は最後の生徒と思ふが、私共より先輩の金澤出身者も、この學校又はその前身の學校とおらないものはない。これからの人々にハイマートといふ様な考えはだんだん薄くなって行くのであらう。併し私共の様に、まだ明治の始に村で生れ田舎町に育ったものには、ハイマートと云ふものが、夢の様に、いつまでも美しく懐かしく思はれるのである。」

西田幾多郎編『廊堂片影』(773～781頁)の北条時敬の1886年(明治19年)の日記には大島氏なる人物が数多く記されているが、これが大島多計比古なのか、漢文担当の大島熙(ひろし)なのかは現状では判断が付かないが、担当も理系科目であり年齢も1歳違いで、英学校での修学時期も重なる大島多計比古の方が近い間柄ではないかと推察するが、博物学についての記載はなかった。

水野はこの得田の下で助手をしていたと思われる。どのような経緯で水野が掛図を制作するに至ったかは未だ解明されていないが、得田が水野と同時期に専門學校と師範學校に勤務していたのは興味深く、今後人物関係から調査を深めたい。

水野掛図の実制作にあたっては、博物学で利用された資料であるのは先の『和漢書目録』で明らかであり、当時の博物学の教員の指導の下・教科書や参考書の挿画を参考にしたと考えている。では当時の教科・教科書・参考書とはどのようなものだろうか。博物学の課された専門学校の予備科及び理学科の課程を表3、4にまとめる。

次に明治17年8月30日制定の専門学校校則『石川県史料』第3巻（64、67頁）を引用する。

「第五章 教授ノ要旨

第一条 附属初等中学各学科教授ノ要旨

…略…

第十款 動物植物

此ノ二科ノ要ハ其名称ヲ識リ其生質ヲ弁シ其効用ヲ詳カニシ概活力ヲ養成シ帰納的心性ヲ薰陶スルニアレハ実物標品模型図画等ノ観察ニ依リ勉テ着実ノ教授ヲ施ス可シ
但実物標品ハ可成本邦所産ノモノヲ用イン事ヲ要ス」

1884年（明治17年）に改訂された専門学校校則では「実物標品模型図画等ノ」とありまた「但実物標品ハ可成本邦所産ノモノヲ」とある。この校則は予備科から改変された初等中学での教授要旨であり、博物学を教授するに当たり実物標品型と共に掛図を用いた可能性を示し、また洋書の挿画をもとに伝統的な毛筆画技法を使って掛図を制作する動機には成り得ないだろうか。水野が在職したのは1886年（明治19年）に入ってからで、掛図は専門学校を高等中学への改変を見越して制作された教材の可能性は無いだろうか。高等中学の学科課程は1886年（明治19年）7月1日に出された「文部省令第十六号」『石川県史資料近代篇（9）』（367～368頁）で示されている。これによると高等中学の修業期間は2年となり、学科と課程は次のように定められた。博物学の部分を抜粋する。

「第四條 高等中学校ノ各学科授業ノ時数凡左ノ如シ

	第一年	第二年	表中法学医学高麗文学トアルハ主トシテ分科大学ヲ指シタルモノナリ
動物及植物	二	七	法学工学文学理学志望生ニハ此科ヲ科セス

第五條 高等中学校ノ各学科ノ程度左ノ如シ

…略… ○動物及植物医科動植物学及人体解剖学」

これでは具体的に教材を制作する動機としては難しいのではないだろうか。よって水野掛図は先の改訂された附属初等中学の教授要旨に則り、初等中学で使用された教材の可能性を今後追っていききたい。

では掛図制作の参考としたであろう教科書・参考書についてはどうだろう。附属図書館には四高由来の洋書が多数残され、その中に専門学校で使用された教科書・参考書も引き継がれている。そのうち生物学は60種71冊に及び、植物学20冊、動物学13冊残されている。専門学校の理学科過程（表4）を見ると植物学にはグレー（Asa Gray）氏植物学、動物学にはフーカー（Hooker.W）

表3 専門学校学科課程表 予備科 (明治14年)『石川県史料』第2巻 (691～692頁)

学 科	時	第壹級	時	第貳級	時	第三級	時	第四級	時	第五級	時	第六級
志 科	六	英国史初歩 仏国史初歩	六	欧羅巴史 初歩	六	羅馬史初歩	六	希臘史初歩				
理 科	六	物理学初歩 植物学初歩	四	地質学初歩 星学初歩	四	物理学初歩 地文学初歩	五	化学初歩				
数 学	六	代数 幾何	六	同上 同上	六	同上 同上	六	算術	六	算術	六	算術
和漢文	六	和文 史記	六	和文 続日本外史	六	和文 神皇正統記 日本外史	七	和文 日本文法 神皇正統記 日本外史	二	和文 日本文法 日本外史	六	和文 日本文法 文章軌範 素読
英 文	五	作文 作文法	七	文法 作文法	七	書取読方 作文・文法	四	書取、読方 会 話、地 理 誌	二	綴字書取 地誌、読方 会話	一六	綴字習字 読方
修 身							一	修身談	一	修身談	一	修身談
図 画	一	着色法 正写画初歩	一	実用幾何 画法	一	配景法 照景法	一	自在画	一	自在画	一	自在画

表4 専門学校学科課程表 理学科 (明治14年)『石川県史料』第2巻 (693～694頁)

学 科	時	第壹級	時	第貳級	時	第三級	時	第四級	時	第五級	時	第六級
物理学	八	磁気学 電気学	八	視学 熱学	六	聴学 熱学	六	物・力・動 通論、重学 水学	六	普通物理学	六	普通物理学
化 学	八	分析化学 製造化学	八	分析化学 製造化学	六	有機化学	六	無機化学	六	普通化学	六	普通化学
地文学											六	ギーカイ氏 地文学
地質学									二	ニコルソン氏 地質学		
金石学							二	ダナー氏 金石学	二	ダナー氏 金石学		
植物学					二	グレー氏 植物学						
動物学					二	ホーケル氏 動物学						
生理学							二	ホクスリー氏 生理学				
星 学											二	ロッケル氏 天文学
数 学	六	積分	六	円錐曲線法 微分	六	平三角 孤三角	六	高等代数 高等幾何	六	高等代数 高等幾何	六	高等代数 高等幾何
図 画	二	製図式	二	諸器械横写 正写画法	二	地図法	二	写生法 着色法	二	実用平面 幾何画法	二	平行配景法 照景配景法

氏動物学とある。これらを著者名として附属図書館の蔵書検索を行うとグレー氏では翻訳書1冊、洋書4冊、フーカー氏では1冊がそれぞれ所蔵しており、これら図書を優先的に掛図原画の挿画調査を行ったが、VMプロジェクトで公開中の3点の水野掛図原画と思われる挿画は見つからなかった。そこで専門学校の洋書として残されたものの中で教科書以外の参考書の幾つかを挿画調査した所、Youmans, Eliza A 著『Second Book of Botany : a practical guide to the observation and study of plants』New York : D. Appleton, 1874年の95頁と96頁に「菓実の図」の原画と思われる挿画が見つかった。(図2、3) 挿画は裂開果(乾燥すると種が弾ける果実)の解説である。掛図と原画のサイズには隔たりがあるが、絵手本等を利用し本画制作を行う東宗の技法には拡大図を描くにも簡素な描線もあり水野が身に付けた伝統的な技法は有効であったと考えられる。またこの洋書は文献36(27頁)では「第四高等中学」の蔵書印のみとあったが、「啓明学校1876～1878年(明治9～明治10年)」の蔵書印が押されていると資料館館長の指摘を受けた。(図4) この参考書を掛図制作に指示した者は啓明学校からの蔵書にも明るい者だったようである。

5. まとめ

今回の調査では水野掛図の筆者水野治三郎と加賀象嵌師の9代水野源六が同一自分人物であること、略歴を確認した。水野が京都府画学校東宗で学んだ背景も分かってきた。さらに水野掛図の原画1点の存在が明らかになり、他の水野掛図にも原画が存在する可能性が出てきた。しかし掛図制作の経緯は未だ不明であり、在職時の周辺人物や残された洋書から新たな調査を行い、他の水野掛図の原画を明らかにしたい。伝統的な東宗の技法を用いながら博物図を描いたと思われ、京都府画学校校有品の中にも多くの絵手本や博物学の資料が残されているようで、水野が学んだ伝統的な絵手本と博物図との比較を行ってみたい。

これら肉筆掛図は明治期に藩校の流れをくみ、早くから高等教育に着手した石川県専門学校での自作教材であり、優秀な人材を輩出した同校の教育の独自性を表していると考えている。また加賀象嵌師9代水野源六の肉筆画でもありその初期画業として原画を明らかにする事は手本と図案制作の同様の関係が見出され、近代工芸史における図案研究、作家研究に資するのではないかと考えている。

またVMプロジェクトでは水野掛図は3点しか公開できていない。今後全点公開を目指し、附属図書館、自然史資料館とも連携をさらに深めていく必要がある。

参考文献

1. 松田清・益満まを編『金沢大学所蔵近代教育掛図目録-印刷図編』
京都大学大学院人間・環境学研究科 2008年
2. 金子一夫著『近代日本美術教育の研究：明治・大正時代編』中央公論美術出版 1999年
3. 金子一夫著『明治中期普通教育図画における毛筆画の発生と展開(一)』茨城大学五浦文化研究所所報第12号1-19頁 茨城大学五浦文化研究所 1989年
4. 京都市立芸術大学「京都府画学校卒業生」『百年史京都市立芸術大学』186頁 京都市立芸術大学 1981年
5. 金沢市史編さん室『市史年表 金沢の百年 明治編』金沢市 1965年

6. 『明治十三年以降 職員沿革略表』 石川縣師範学校 金沢大学資料館蔵
7. 鴻盟社編「画学校卒業生」『大日本美術新報』第27号 明治19年『大日本美術新報』第3卷161頁 ゆまに書房 1990年
8. 『職員履歴 第一輯 庶務係』金沢大学資料館所蔵
9. 『石川県職員録 明治18年』池善平等 1889年
10. 石川県史調査委員会、石川県立図書館史料編さん室編「石川県学事報告」『石川県史資料近代篇9』石川県 1983年
11. 第四高等中学校編『第四高等中学校一覽 明治20年～明治21年』第四高等中学校
12. 板垣英治著『金沢大学の淵源=加賀藩医学館から甲種医学校まで、および石川県啓明学校・石川県専門学校の歴史』金沢大学資料館 2012年
13. 文部省編「石川県年報」『文部省年報 第十三附録』文部省 1886年
14. 黒川威人著『水野源六家と加賀金工 (1)』金沢美術工芸大学紀要35号23-36頁 金沢美術工芸大学 1991年
15. 金沢市HP <http://www4.city.kanazawa.lg.jp/17003/dentou/kougei/zogan.html>
16. 金沢市役所編『金沢工業沿革誌料』金沢市役所 1905年
17. 今井一良著「泉鏡花と井波塾をめぐって
: 塾主井波他次郎と彫金師水野源六、鋳物師木越右衛門のことなど-」
『石川郷土誌学会々誌』第21号17-27頁 1988年
18. 『実業功績者事績調』石川県 1919年 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
19. 『水野源六履歴下書』金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
20. 『金沢銅器製造元記』金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
21. 山崎達文著『金沢銅器会社研究 (一) - 資料紹介『金沢銅器製造元記』金沢学院大学紀要「文学・美術編」第4号81-89頁 2004年
22. 松尾芳樹著「画学校出仕について」京都市立芸術大学芸術資料館年報18号1-37頁 2008年
23. 松尾芳樹著「京都府画学校の教育」京都市立芸術大学芸術資料館年報19号1-24頁 2009年
24. 松尾芳樹著「京都府画学校の校有品」京都市立芸術大学芸術資料館年報20号1-25頁 2010年
25. 松尾芳樹著「京都府画学校の研究」鹿島美術財団年報28号別冊130-140頁 鹿島美術財団2010年度版
26. 東京国立博物館編『明治のデザイン誕生 - 調査研究報告書「温知図録」』国書刊行会 1997年
27. 田中善男著『金沢金工の系譜と変容』国際連合大学 1980年 (人間と社会の開発プログラム研究報告)
28. 田中善男著『金沢の伝統文化』日本放送出版協会 1978年
29. 田中善男著『加賀象嵌職人 - 米沢弘安の人と作品 - 』北国出版社 1974年
30. 金沢美術工芸大学美術工芸研究所編『金沢の近代工芸史研究』金沢美術工芸大学美術工芸研究所 1995年
31. 石川県教育会金沢支会編『金沢市教育史稿』第一書房 1982年

32. 石川県教育史編さん委員会編『石川県教育史』 第一巻 石川県教育委員会 1974年
33. 金沢大学50年史編纂委員会編『金沢大学五十年史 通史編』金沢大学創立50周年記念事業後援会 1996年
34. 『人物で見る金沢大学の150年 - その伝統と創造 - 』金沢大学資料館 2012年
35. 第四高等中学校『第四高等中学校本部和漢書目録』第四高等中学校 1894年
36. 板垣英治著『石川県専門学校洋書目録：明治日本の近代化に貢献した洋書』金沢大学資料館 2004年
37. 『旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録』金沢大学資料館蔵
38. 上杉知行著『西田幾多郎の生涯』一燈園燈影舎 1988年
39. 上杉知行著『偉大なる教育者 北条時敬先生』北国出版社 1978年
40. 西田幾多郎著「明治の始頃、金沢の古本」『西田幾多郎全集』第12巻 岩波書店 1950年
41. 西田幾多郎編『廓堂片影』教育研究会 1931年
42. 西田幾多郎著『西田幾多郎の声 手紙と日記が語るその人生』前篇 書肆心水 2011年
43. 石川県立図書館編『石川県史料』 第2巻、第3巻 石川県立図書館 1972年
44. Youmans, Eliza A 著『Second Book of Botany : a practical guide to the observation and study of plants』New York : D. Appleton, 1874年

注

- 1 金沢大学資料館ヴァーチャルミュージアムプロジェクト <http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/>
金沢大学所蔵貴重資料リポジトリ
<http://muse-lib-collection.lib.kanazawa-u.ac.jp/>
附属図書館では金沢大学所蔵貴重資料リポジトリという名称で、金沢大学学術情報リポジトリと同一のシステムを利用し公開している。今後、VMプロジェクトと統合を検討している。
- 2 当初900点以上と思われたが、未調査掛図が多数発見され総数は現在調査中である。
- 3 印刷掛図のうち発行年の早い物にはリトグラフ、エングレービングが使われているが、詳細は未調査。
- 4 文献1
京都大学電子図書館 貴重書資料画像
<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/kakez4ko/index.html>
- 5 『沿革誌料』と「除籍簿」での二男、三男の記載の違いは今井氏の論文で明らかにされている。水野治三郎は石王氏の三男に当たる。泉鏡花の父清二は白銀師であり、7代水野源六に弟子入りしている。また9代水野源六の兄弟である井波他次郎（他次郎も井波氏に養子となっている）は井波塾という寄宿制の塾を営んでおり、泉鏡花はここで英語を学んでいる。泉鏡花関連資料からの水野治三郎調査を今後期待したい。
- 6 『銅器会社製造元記』制作年著者とも不詳であるが1872年（明治5年）から1895年（明治28年）までの記録がある。
- 7 翻刻は山崎達文氏の論文（文献21）を引用したが、一部訂正追記した。傍点部、（付紙）部
- 8 京都市立芸術大学、芸術資料館に水野関連資料について問い合わせた所、卒業年のみ確認できた。
- 9 1880年（明治13年）には後に凶案で帝室技芸員に任命される岸光景が石川県勸業博物館で

図案指導を行った。

- 10 この『和漢書目録』には水野掛図と同様に一軸と表記された資料が他にも記載され、これらが掛図として残されている可能性も今後の調査で明らかにしたい。
- 11 『廊堂片影』775頁・1886年（明治19年）の日記には「三月十五日 田上奥田大島ト向山ニ遊歩ス 比朝駒澤氏来レリ 桐生某ノ教訓ヲ頼ム應セス 得田氏西田某氏ノ父ト共ニ其教訓ヲ依頼ス」とある。



図1



図2



図3



図4

掛図1 海百合ノ図 (白)



掛図2 葉実ノ図



掛図3 植物想像ノ図



図5 (撮影 堀井洋)

掛図4 食虫植物図



掛図5 七路之図



(ヘラサギ)

掛図6 鳥類骨格図 (白)



掛図7 Rhinoceros Horn-bill



(サイチョウ)

掛図8 蜘蛛猿ノ図



掛図9 Goat-Sucker



(ヨタカ)

掛図10 蛙類編還之図



図5 (撮影 堀井洋)

掛図11 企鵝之図



(ペンギン)

掛図12 植蟲等の図



掛図13 血液循環図



掛図14 人体縦横截面図



掛図15 心臟図

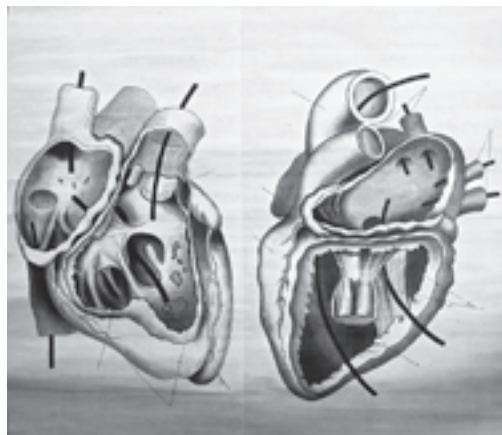


図5 (撮影 堀井洋)